

高橋宣勝著

## 『語られざるかぐや姫』

小嶋菜温子

「国民的物語」である『竹取物語』。日本人なら誰でもしってる、かぐや姫の伝承。その起源と文化的な特殊性について、日本はもとより中国・インドにひろがる類話との比較をとおして考察されている。伊藤清司『かぐや姫の誕生』や、国文学の研究成果をふまえての、あらたな視点からの試みである。本書は、かぐや姫の伝承がきわめて少ないという

ことによる、なぜ語られなかつたか、なにが昔話化を阻んだのかを問い合わせて、かぐや姫の昔話・竹取説話と『竹取物語』との連続・不連続について、仏教的な輪廻転生の発想との関わりから見直そうとする。

結論として、『竹取物語』は天人流譲の思想

に根ざしながら、それが日本文化にとって異質の思想であつたがために仏教輪廻的に変容され、くわえて伝承世界にふかく根づくこともなかつたのだとする。かぐや姫の物語は、

や姫の誕生』や、国文学の研究成果をふまえての、あらたな視点からの試みである。本書は、かぐや姫の伝承がきわめて少ないとい

うことによる、なぜ語られなかつたか、なにが昔話化を阻んだのかを問い合わせて、かぐや姫の昔話・竹取説話と『竹取物語』との連続・不連続について、仏教的な輪

廻転生の発想との関わりから見直そうとする。

結論として、『竹取物語』は天人流譲の思想

—163—

して「聴耳」にみる、昔話の変容と不变性について論じられている。柳田国男をはじめとする神話と昔話の本質的な差異をめぐる議論、あるいはプロップ以来の話型分析の方法を、どのように継承発展すべきか。そうしたおおきな問題にかかわる部分であるだろう。本書は、語り手の「肉づけ」によって、つねに変容するのが昔話だとしつつ、しかし変わらない基本的な「骨格」「基本構造」があるとす

る。その不变的な構造をささえるのは、「聴耳」や「童子」といったキーワードだとして興味ぶかく、さらに例証されたいとの感想をもつた。

I の後半では、「鶴女房」「蛤女房」などの日本の異類婚姻譚と、西洋の異類婚姻譚（「蛙の王様」「小さな歯の犬」）とのちがいを、変身の思想にみている。「異類と人間は同じレベルの存在だ」と考える、日本の「アニミステイクな世界観」をその背景にみていく。昔話の「構造にあらわれない思想」、「構造を支えている思想」への注視は、IIで展開される「語られざるかぐや姫」の方法的な布石であり、本書の重要なポイントである。

II 書評  
I 書評  
1 『竹取物語』と昔話 2 竹取説話  
と『竹取物語』 3 竹取説話と輪廻  
界観 5 外来昔話の変容  
II 語られざるかぐや姫  
1 『竹取物語』と昔話 2 竹取説話  
と『竹取物語』 3 竹取説話と輪廻  
界観 5 外来昔話の変容  
想と日本人  
転生譚 4 『竹取物語』と天人流譲  
譚 5 かぐや姫の文学史 6 『竹取  
物語』のルーツを探る 7 流譲の思  
考と日本人  
の前半では、「花咲爺」や「蛇姫入り」そ

展開される。これまでに外来種であるとされている「大工と鬼六」「手なし娘」などにみる、「取捨選択」や「代用」の様相がたどられる。伝承にあずかる人々の世界観や自然観を反映する昔話を読み解くことは、「文化の解説」であるとするのは言われるところであろう。『竹取物語』そして竹取説話の解説が、日本文化テクストの解説であることは論をまたない。

Ⅱ。かぐや姫の昔話は『日本昔話大成』で十例強を数える程度であるが、昔話化を阻むのは『竹取物語』といふ物語の構造そのものにはかならない。そのことがまず、かぐや姫と小さ子譚との差異に確かめられていく。「力太郎」「一寸法師」「瓜子姫」との比較から、小さ子として出生しながら、小さ子としての行動をとらない主人公のありかたを指摘する。また、致富譚とのちがいも、「竜宮童子」との対比によって、主人公の行動の「構成の背景にある論理」の差としておさえられる。あるいは難題婿譚との相違も、ストーリー的にいえる。そのようにして、柳田以来の物語のズレを強調したうえで、かぐや姫の

昇天という物語の最大の問題へとたちむかう。「矛盾と混亂」に満ちた、「輪廻とはいえないもの」だとする(竹取説話のもつ不自然さは、

昇天をめぐっては、まず天人女房・羽衣譚のあいだの「構造の背後にある論理」「思想」の違いが浮上する。かぐや姫が地上に降りた

理由は、罪を犯したことにある。昇天は罪の刑期が終わつたからだとする『竹取物語』には、〈流謫〉の思想がある。いっぽうの竹取説話にはそれがない。『今昔物語集』『海道記』

あるいは『古今和歌集』の注釈書類におさめられた竹取説話には、〈流謫〉の思想はみられない。かわりに、仏教的な輪廻転生の発想によつている。本書はそこに、『竹取物語』と

竹取説話のあいだの決定的な違いを見る。竹取説話の、かぐや姫の誕生と昇天が不自然なものであることの指摘は大事だ。

ただ、ルーツが中国かインドかという問題

とは別に、天人流謫の発想をめぐっては、仏教と道教の交錯という厄介な問題が横たわる。中国の登仙・墮天使の発想に注目する益田の

論も、『竹取物語』における神仙思想の問題

を喚起するものであった。本書(二三二頁)にも「たしかに、中国には道教の説く神仙世

界が一方にあり、他方には仏教の輪廻思想があつたから、それらのなかから天人流謫の思想が生まれたとしても不思議ではないかもし

れての最大の障害だったとみるのである。昇天をめぐっては、まず天人女房・羽衣譚のあいだの「構造の背後にある論理」「思想」の違いが浮上する。かぐや姫が地上に降りた

理由は、罪を犯したことにある。昇天は罪の刑期が終わつたからだとする『竹取物語』には、〈流謫〉の思想がある。いっぽうの竹取説話にはそれがない。『今昔物語集』『海道記』書の中核にあたる。益田勝実は『竹取物語』の天人流謫の思想について、それ以前の日本にはなかつたもので、中国から入つたものとした。それをうけて、『漢武故事』の「西王母」にある東方朔の話などの流謫伝へ、そしてさらにインドの『カターラ・サリット・サガラ』などの天人流謫説話へと目を転じての考察は教えられる。

ただ、ルーツが中国かインドかという問題のものであることの指摘は大事だ。とは別に、天人流謫の発想をめぐっては、仏教と道教の交錯という厄介な問題が横たわる。中国の登仙・墮天使の発想に注目する益田の論も、『竹取物語』における神仙思想の問題を喚起するものであった。本書(二三二頁)にも「たしかに、中国には道教の説く神仙世界が一方にあり、他方には仏教の輪廻思想があつたから、それらのなかから天人流謫の思想が生まれたとしても不思議ではないかもし

れない。」との断り書きがあるが、それはな  
お追求されるべき重要な課題であると考えら  
れる。『竹取物語』の天人の扱いに、仏教・道  
教それぞれの影響がみられるることはさまざま  
に論じられてきた。なかでも、道教的な神仙  
思想の投影については、最近の大きな論点の  
ひとつとなっている。渡辺秀男あるいは評者  
などによつて、小南一郎や下出積与などの関  
連諸領域での成果をふまえながら、『竹取物  
語』の思想的な背景としての神仙觀をほりお  
こす作業がつづけられつつある。また、日本  
の道教受容についてさらに探求する、増尾伸  
一郎の一連の考察など、これから『竹取物  
語』研究への指針が示されつあり、評者も  
ふくめて今後なお考るべきことは山積みさ  
れている。

したがつて、本書が『竹取物語』の基本的  
な枠組みを仏教的な輪廻転生の発想と切り分  
けたことは、国文学研究の流れからみても首  
肯される。とともに今後の課題のひとつとし  
て、仏教的な輪廻転生と、道教的な天人流譲  
の思想とが根本的にどのように違い、またど  
のように接しているかを厳密に見きわめてい  
く必要があるだろう。かぐや姫が地上にのこ  
した不死の薬に象徴される、神仙觀の位相は  
したがつて、本書が『竹取物語』の基本的  
な枠組みを仏教的な輪廻転生の発想と切り分  
けたことは、国文学研究の流れからみても首  
肯される。とともに今後の課題のひとつとし  
て、仏教的な輪廻転生と、道教的な天人流譲  
の思想とが根本的にどのように違い、またど  
のように接しているかを厳密に見きわめてい  
く必要があるだろう。かぐや姫が地上にのこ  
した不死の薬に象徴される、神仙觀の位相は

さらに問われねばならないはずである。すで  
に評者も、死を宿命とする地上界の原理との  
対比の相において、『竹取物語』の不死觀を  
みてきたが、本書の論述をふまえることに  
よつても一度この問題を考えなおしていき  
たいと思う。

最終節（II-7）「流譲の思想と日本人」にお  
いて著者は、『竹取物語』が中国から導入し  
た天人流譲の思想が結局日本に根づかなかつ  
た理由について次のように結論づけた。すな  
わち、折口信夫の「まれびと」論などを引き  
ながら、日本の宇宙觀は本質的に水平思考で  
あること。よつて、垂直思考である天人流譲  
とは相容れず、かぐや姫の本来の姿は理解さ  
れることがなかつたのだとする。アマテラス

の解釈についてなど検討の余地はなおりそ  
うだが、『竹取物語』の基本構造をとらえる  
ダイナミックな視座には啓発される。  
さらに本書の注視した流譲の思想の根幹に  
は、「罪」の問題がある。それは『竹取物語』  
がのちの文学史に積み残した大きな難題で  
あった。これについて考えることは、日本文  
化の基層にうずまく罪障意識を解くことにつ  
ながろう。領域をこえた意見交換がより活発  
になされるべきことをも、本書は示して意義  
ぶかい。

（こじま・なおこ／恵泉女学園大学）

大修館書店 二〇六〇円

## 書評 花部英雄著

### 『西行伝承の世界』

川島秀一

著者には『江差の繁次郎話』（青森県昔話  
記録会、一九八〇）や、『扇屋おつる——岩  
手・衣川の昔ばなし——』（みちのく民芸企

画・一九八七）などの、東北地方の世間話や  
昔話集などの貴重な共著（編著）がある。

著者も民俗と文献の中に旅を始めた。